

看護職が常駐する子育て支援の場の機能の検討

— 大学と病院の連携による子育て支援 —

槻木 直子¹⁾ 岩國 亜紀子¹⁾ 菅野 峰子²⁾ 橘 貴子²⁾
 箕浦 洋子²⁾ 赤松 恵美³⁾ 工藤 美子⁴⁾ 山本 あい子⁵⁾

要 旨

【目的】

子育て中の人や、子どもや自分自身のことについて看護職に気軽に相談できる場は地域の中にほとんどない。そこで、看護ケアのシステム構築を図る大学と、相談対応を担う看護職をバックアップできる病院が連携して、看護職による健康・育児相談や養育者同士の交流、養育者が学ぶための育児講座が含まれる子育て支援の場を企画し、病院の中に開設した。本研究では、看護職が常駐する子育て支援の場（以下、本子育て支援の場）を利用した養育者の体験から、本子育て支援の場の機能について検討する。

【方法】

研究デザインは、半構造化面接による質的探索的研究である。研究協力者は、本子育て支援の場を複数回利用した乳児の養育者である。面接で得られた録音データを逐語録にし、看護職の働きや本子育て支援の場そのものが養育者にどのように受け止められているかについて述べている部分に注目して内容の分析を行った。

【結果】

研究協力者7名は、5～10か月の乳児を養育する母親で、平均年齢33.1±4.1歳だった。分析の結果、養育者が認識した看護職の働きとして34のコードが抽出され、【些細な気がかりに応じてくれる】【子どもの成長発達を可視化させてくれる】【「行こう」と思える場を作り出してくれる】に集約された。また、養育者が捉えた本子育て支援の場の特徴として19のコードが抽出され、【養育者同士で話せる】【気軽に看護職に相談できる】に集約された。

【結論】

本子育て支援の場では、看護職が養育者の些細な気がかりに応じて、子どもの成長を可視化させ、養育者が「行こう」と思える場を作り出すという働きを行っていた。また、養育者にとっては養育者同士で話せる場であり、気軽に看護職に相談できる場として捉えられていた。本子育て支援の場は、養育者同士で話したいというニーズと、専門家に気軽に相談したいというニーズの双方に応える場となっていた。

キーワード：乳児の養育者、看護、教育機関、医療機関、半構造化面接

-
- 1) 兵庫県立大学地域ケア開発研究所 周産期ケア研究センター
 - 2) 兵庫県立尼崎総合医療センター
 - 3) 高知大学医学部看護学科
 - 4) 兵庫県立大学看護学部
 - 5) 兵庫県立大学地域ケア開発研究所

I. 研究背景

乳児の養育者の中でも育児不安が高いものは、何でも話せる友達がいないと答えた割合が有意に高く¹⁾、育児について本やマス・メディアからではなく育児の経験者や医療者から会話を通して情報を得ることを必要としている²⁾。また、同じ立場の人および医療者等専門家の両方に気軽に会えて親子で楽しめる場に参加した乳児の養育者は、医療者など専門家から正確な情報を得たり、育児体験者の生きた経験を聞いたりすることで、悩みの解決につながる対処法や子どもに関わる手段を学んでいる³⁾。これらにより、“養育者同士で話ができて、気軽に看護職等医療者に相談ができ、親子で楽しめる場”の提供は、乳児の養育者のニーズに合致した有効な子育て支援方法と考える。

子育て支援を主に担う機関や団体は、地域子育て支援センター、子育て広場（つどいの広場）、保育所、幼稚園、児童館・児童センター、市民センター等であり、そこでは保育士や相談員等が育児支援にあたっている⁴⁾。看護職等医療者が行う子育て支援には、看護協会の看護ボランティアが地域の子育て支援の場に出向いて相談に乗る子育てまちの保健室⁵⁾、母乳等電話相談窓口の設置⁶⁾のほか、病院や看護系大学が開催する親同士の情報交換・交流の場、子どもと一緒に楽しむ場、育児講座がある⁷⁻¹¹⁾。これらは、通常の子育て支援の場と比べると開催場所と頻度が少なく、子育てに関する相談者として医師・看護師等専門家をあげた養育者は1.3%しかない¹²⁾。このように、現状の子育て支援には、乳児の養育者が求める“当事者同士が集う場”に比較して、“気軽に看護職等医療者に相談できる場”が不足しているという課題がある。

看護職等医療者が気軽に子育て相談に応じるためには、診療以外に養育者や子どもと直接出会える場に出向くことが必要である。しかし、新たな取り組みを企画し、専門職として相談対応の質を確保し、継続的に実施していくための人材や企画力、財源を確保していくことは、各病院や各看護系大学など一つの組織だけでは難しい面があると推測される。そこで、看護ケアのシステム構築を図る大学と、相談対応を担う看護職をバックアップできる病院が連携して、看護職が常駐する子育て支援の場

（以下、本子育て支援の場）を企画し、病院の中に開設した。この取り組みは、乳児の養育者とともに行ったアクションリサーチ³⁾の成果がもとになっている。

本子育て支援の場を開設した病院は、人口45万人の中核市において高度急性期医療の役割を担い、総合周産期母子医療センターを併設する地域の中核病院である。本子育て支援の場には、看護職による健康・育児相談や養育者同士の交流、養育者が学ぶための育児講座が含まれ、毎週水曜日10～15時に開催している。運営は、大学と病院に所属する看護職に加えて、看護協会に登録している看護ボランティアが複数名、事務職が1名、地域のボランティア数名が常駐し行っている。その他、病院の医療者（看護職、医師、薬剤師、栄養士、歯科衛生士、臨床心理士等）が必要に応じて相談対応に協力している。開設月は7.5人/回だった利用者数が、2.5か月経過した時点では11.3人/回と徐々に増えてきているが、本子育て支援の場がもつ機能については明らかになっていない。これらを明らかにすることで、乳児の養育者のニーズをもとに企画した本子育て支援の場の評価を行い、今後の取り組みへの示唆が得られると考える。なお、「機能」という概念は「作用、働き」といった意味合いで用いられる¹³⁾ことから、本研究では、乳児の養育者が看護職の関わりをどのように受け止めているかに注目して看護職の働きを見定め、乳児の養育者が捉えた本子育て支援の場の特徴を明らかにすることで本子育て支援の場の機能の検討を行うこととする。

II. 研究目的

本研究の目的は、看護職が常駐する子育て支援の場を利用した養育者の体験から、本子育て支援の場の機能について検討することである。

III. 研究方法

1. 研究デザイン

研究デザインは、半構造化面接による質的探索的研究である。

2. 研究協力者

本子育て支援の場を複数回利用したことのある乳児の養育者を研究対象者とし、そのうち研究協力の同意が得られたものを研究協力者とした。

3. データ収集期間

2016年1月20日～2月24日

4. データ収集方法

データ収集期間中に開催した計6回の本子育て支援の場の利用者のうち、利用が2回目以上の乳児の養育者全員にリクルートを行った。研究協力の同意が得られた乳児の養育者には、面接を行う日時や、面接を行う際に乳児を同席させるか別室でスタッフに預けるかの希望を確認したうえで、インタビューガイドを用いた半構造化面接を行った。30分程度の面接では、本子育て支援の場への参加時に求めていること、本子育て支援の場に参加してどうなったか（問題は解決したか等）という視点をもとに、乳児の養育者が本子育て支援の場で体験したことについてその具体的内容や養育者の思い（受け止め）を聞いた。基礎情報として、養育者の年齢、乳児の月齢、子どもの人数を本人に確認した。面接はプライバシーの保たれる場所で行った。なお、面接担当者は本子育て支援の場で活動する看護職でもあり、相談対応などに直接関わった者が面接をすると、面接者の聞き方に偏りが生じたり、研究協力者である乳児の養育者が話す内容に偏りが生じる可能性が考えられた。そのため面接は、その養育者への相談対応などに直接関わっていない者が担当することで、それらの偏りが生じないよう配慮した。研究協力者の了承を得たうえで面接の内容をICレコーダーに録音し、逐語録を作成した。面接終了時には500円程度の謝礼の品を渡した。

5. データ分析方法

面接で得られた逐語録は繰り返し精読し、看護職の関わりや本子育て支援の場について述べている部分を抽出した。抽出した内容は、質的意味を損なわない範囲内で区切ってコード化した。乳児の養育者の体験や受け止めとしてコード化した内容は共通性を基に分け、そこから、その体験や受け止めに作用した看護職の働きや、養

育者が捉えた本子育て支援の場の特徴についてのサブカテゴリーを作成した。サブカテゴリーは、その同質性・異質性にに基づき分類・集約し、さらに抽象度を上げたカテゴリーを作成した。尚、分析過程においては、母性看護学の質的研究に精通した研究者らが複数で討議することで分析の厳密性の確保に努めた。

IV. 倫理的配慮

研究対象者には研究の目的、方法、意義の他、研究の協力および途中辞退は本人の自由意思であること、研究協力をしないことや途中辞退をすることで何ら不利益を受けないこと、研究結果の公表、匿名性の保持、情報漏えいの防止、研究協力による負担防止の方法について口頭と文書で説明した。本研究は、研究者の所属する組織の研究倫理委員会の承認を得て行った。

V. 結果

1. 研究協力者と面接の概要

研究期間中、研究対象となる乳児の養育者は9名おり、そのうち7名の研究協力者を得た。研究対象者2名が研究協力に至らなかった理由は、面接を行う時間を確保することが難しいためであった。研究協力者は乳児を養育する母親で、年齢は 33.1 ± 4.1 (27～39)歳であった。養育している乳児の月齢は、5か月が1名、6か月が1名、7か月が1名、8か月が3名、10か月が1名であった。養育する子どもの人数は、子ども1人が5名、子ども2人が1名、子ども3人が1名であった。面接は一人につき1回実施し、面接時間は 31.4 ± 4.6 (24～37)分/回であった(表1)。

2. 分析の結果

乳児の養育者が認識した看護職の関わりについては30のコードが抽出され、そこから乳児の養育者の体験や受け止めに作用した看護職の働きとして13のサブカテゴリーが作成され、3のカテゴリーに集約された(表2)。また、本子育て支援の場に関する乳児の養育者の体験や受け止めとして14のコードが抽出され、そこから乳児の養育者が捉えた本子育て支援の場の特徴について4のサ

表1. 研究協力者とインタビューの概要 (n=7)

	平均±標準偏差 (範囲)	人数
年齢 (歳)	33.1±4.1 (27~39)	
養育している乳児の月齢		
5か月		1
6か月		1
7か月		1
8か月		3
10か月		1
養育している子どもの数		
子ども1人		5
子ども2人		1
子ども3人		1
インタビュー時間 (分)	31.4±4.6 (24~37)	

ブカテゴリーが作成され、2のカテゴリーに集約された (表3)。以下、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを<>、研究協力者の語りを斜字、研究協力者の語りの補足説明を()、研究協力者のIDとデータ番号を〔〕で示し、カテゴリーごとに説明する。

1) 乳児の養育者が認識した看護職の働き

乳児の養育者が認識した看護職の働きに関するカテゴリーは、【些細な気がかりに応じてくれる】【子どもの成長発達を可視化させてくれる】【「行こう」と思える場を作り出してくれる】であった。

(1) 【些細な気がかりに応じてくれる】

このカテゴリーは、看護職が、養育者の‘些細なこと’や‘気がかり’についての相談に応じ、情報や知識、考え方を提供していることを示していた。また、その際には具体的な数値を用いてアドバイスしたり、子どもの身体をみながら説明したり、子どもにとって効果的な関わりを見極めながら養育者が続けやすいやり方を見せていることを示していた。これは、<些細なことでも相談に応じてくれる><気がかりに対して情報や知識、考え方を提供してくれる><具体的な数値をもとにアドバイスしてくれる><子どもの体をみながら子どもに何が起きているのか説明してくれる><子どもにとって効果的な関わりを見極め、続けやすいやり方を見せながら教えてくれる>の5つのサブカテゴリーで構成された。

<些細なことでも相談に応じてくれる>は、養育者が

些細で、ふと思うようなことでも看護職は親切に答えていること、養育者は看護職に話すことでホッとできていることを示していた。

・色々些細なこととかでも、気軽に聞けるのですごいいいなと思って、割と行けるときは行こうと思って、いいいなと思って [B2]

<気がかりに対して情報や知識、考え方を提供してくれる>は、養育者が気になっていることや自分だけじゃわからないと思っていることについても看護職は答えていること、それに対して養育者は、ネットからは得られないちゃんとした情報をくれると感じていることを示していた。さらに、悩んでいたが看護職に言われた言葉で楽になり、具体的な方法を教えてもらったと捉えていることを示していた。

・インターネットにはないような、インターネットってほんとにいい加減なところもあるんで。それになんかちゃんとした情報とかもくれたりするじゃないですか、そういうところも有難いですね。やっぱり全然違いますね [F17-3]

・〇〇さん(看護職)が。育児にメリハリができるって言われたのがすごい印象的で。確かに(子どもと)ずっといるのも幸せな事かもしれないけども、(保育園に子どもを)預けて(仕事から)家に帰ってきて家にいる時間、その子がよくみれるというか。それはなんとなく自分でも思ってたんですけど。それ言われたらあっそうかって楽になったっていうか [G20]

＜具体的な数値をもとにアドバイスしてくれる＞は、看護職が授乳前後の体重を測ったうえで具体的な数値をもとに相談に応じていること、それに対して養育者は助かったと思い、具体的な数値を知ることでミルク補足を自己決定するきっかけになったことを示していた。

- ・この子が体重が軽いので、そこをちょっと気にして、そしたら小児科の看護師さんが来てくれて、授乳前と授乳後の体重測ってくれたり、相談に乗ってくれたから助かりました [E7-2]
- ・ちゃんとミルクを始めよってというきっかけにはなりました [E10]

＜子どもの体を診ながら子どもに何が起きているのか説明してくれる＞は、看護職が直接子どもを見て、子どもの体の特徴から原因を説明していること、そのことで養育者は安心し、前向きな気持ちになれたことを示していた。

- ・原因をはっきり教えてくれはるとこが私は安心する。うつ伏せがすごい嫌いなんは腹直筋が割れてるからしんどいんやと思いますって教えてもらって、それまで、なんで泣いてるのか分からないみたいな感じ、(略) ああどうしよ、何が原因なんやろって思っても、原因まではやっぱりマッサージの先生は教えてくれない。〇〇さん(看護職)の場合は腹直筋が割れてるから多分しんどいと思うって言ってくれはって、実際にでべそがおさまって、でべそがすごい出たのに、腹直筋が割れてるからだよって言われて、あっそうなんやって思って、もう原因が分かると安心するし [CA2-1]

＜子どもにとって効果的な関わりを見極め、続けやすいやり方を見せながら教えてくれる＞は、看護職が養育者の目の前で子どもと関わることで、効果的な関わり方を見極めつつ、養育者が続けやすいやり方を見せながら教えていること、そのことで養育者は関わりの効果や気持ちよさそうな子どもの様子を見ることができ、自分もやろうかなと思ひ、実際に家でもやってみると効果があったことを示していた。

- ・やっぱり目の前で(遊びながら子どもの体をほぐす方法を) やって(見せてくれて) 実際に効果がちょっと

と見えて、本人も気持ちがよさそうだってなるとすごい信憑性もあるし、安心感もあるし、いいんだろなっていうのがすごい残るんで。(略) 気づいたらやるっていう風に、ちゃんと残ってるんですね、自分の中に。やろうかなっていうのが。それはあります [F22-2]

(2) 【子どもの成長発達を可視化させてくれる】

このカテゴリーは、看護職が、子どもの成長発達の様子について養育者が捉えやすいように目に見えやすい形で示すという働きを示していた。これは、＜子どもの成長を数値で見せてくれる＞＜子どもの動きから発達を示すサインを教えてくれる＞の2つのサブカテゴリーで構成された。

＜子どもの成長を数値で見せてくれる＞は、看護職が子どもの正確な体重を測定し、測定した体重や身長を成長曲線のグラフに記載して養育者に示していること、そのことを養育者はありがたいと感じていることを示していた。

- ・ここだったら時間があれば(子どもの服を) 脱がしてくれていいよっていうか、本当の体重に近いのが測れるんで、それはありがたいです [A10-2]
- ・(体重) 測ってもらってこない身長も測ってもらって。(成長曲線の) グラフも印いれてくれたし [E27]

＜子どもの動きから発達を示すサインを教えてくれる＞は、看護職が、親が気づいていない子どもの動きに気づいて養育者に伝えていること、それに対して養育者は安心し、子どもの運動面の発達について看護職の冷静な判断が欲しいと思っていることを示していた。

- ・一人で見てるだけだと、本とかで8か月はこんなんで書いてあっても、それができてるのかがいまいちよくわからない。今ももぐもぐごっくん、もぐもぐ期って書いてあるけど、もぐもぐしてないんじゃないかなと思ひながら毎日過ごしてるから、ほかの動き方でもできてるって言われたら、ちゃんと範囲内って、いっちゃんだけどって思える [A16]

(3) 【「行こう」と思える場を作り出してくれる】

このカテゴリーは、気がかりを話しやすいよう看護職が自ら積極的に養育者や子どもに関わり、養育者同士の交流を促し、感染防止対策を行っていることを示していた。これは、〈スタッフから積極的に関わってくれる〉〈気がかりを話しやすいよう看護職から聞いてくれる〉〈話を聞く姿勢でいてくれる〉〈継続的に関わってくれる〉〈養育者同士で話しやすくしてくれる〉〈感染を防ぐ対策をしてくれる〉の6つのサブカテゴリーで構成された。

〈スタッフから積極的に関わってくれる〉は、看護職が自ら養育者に話しかけ、子どもと関わり、遊び方を教えていること、そのことを養育者は、他の子育て支援の場との違いと捉えていることを示していた。

- ・一回来てみたら、すごい（スタッフから）親とも話（を）して下さるのがわかって、ちょいちょい来るように〔A2-2〕
- ・ここに来ると看護師さんとかボランティアの方とか保健師さん保育士さんが見てくれたり、遊び方とかも教えて頂けるのでほんとにそれはありがたい（C5-3）。（略）（他の子育て支援の場は）（略）やっぱり誰かが何か教えてくれるとかそういう感じじゃないので〔C8〕

〈気がかりを話しやすいよう看護職から聞いてくれる〉は、看護職が自ら養育者に気にかかっていることはないか聞いていること、それに対して養育者は、看護職から聞いてくれると言いやすいと感じていることを示していた。

- ・（看護職が気になることはないかと）言わなかったら多分持ち帰ってました。なので、聞いてくれてるって思って、出せ出せみたいな、さあ今聞いてくれてるって思って〔A52〕

〈話を聞く姿勢でいてくれる〉は、看護職が養育者から親身になって話を聞いてくれたと捉えられるような姿勢で関わっていること、そのことがまた行きたいという養育者の思いにつながっていることを示していた。

- ・ここはほんとに、助産師さんだとか先生だとか、研

究の方みなさんが親身になっていろいろお話を聞いてくれるとこだなっていうのがあって、それが他のところと違うところですね。（他の子育て支援の場のスタッフも）聞けばもちろん話してくれますけど、そんなに入ってこようとはしないんですよね、あんまり。そこがどっちかっていうとこのほうがしっかりされてる感じですね。相談事とか。そういう意味で何か困ったことがあったら、友達ともしゃべれるしここ来たついでにいろいろ先生に聞けるし、話が出来るといいなっていうのはありますね〔F11-2〕

〈継続的に関わってくれる〉は、看護職がいつもその場にいることにより養育者から聞きやすい存在として捉えられていること、顔なじみの看護職にアドバイスを求める方が安心で、信頼できると養育者が思っていることを示していた。

- ・電話だったら相談者の一人、1件みたいな感じですけど、こうやって回数重ねてくると、顔なじみっていか〇〇ちゃんって言ってもらったりとか、そういう方にアドバイス受けるほうが安心って言うか、信頼できる〔G27-3〕

〈養育者同士で話しやすくしてくれる〉は、看護職が同じ月齢の子どもがいる養育者同士で話ができるように話を振っていること、それに対して養育者も、看護職がいてくれると話に入りやすい、みんなで話しやすいと感じていることを示していた。

- ・離乳食のこと気になるねみたいなこと話してたら、他に気になる人いるんちゃう？みなさんどうですか？みたいな感じで、みんなどう？みたいな感じで（看護職が）話を振ってくると、入りやすい〔C30〕。（略）（看護職が）なんとなく話をまわしてくれはるのですごいありがたい〔C32〕

〈感染を防ぐ対策をしてくれる〉は、本子育て支援の場を外来患者と接触せずに来室できる場に開設したり、おもちゃの消毒や排泄物を介した感染を防ぐ配慮がされていること、それに対して養育者が安心して利用できると感じていることを示していた。

・体重測るのも、小児科で相談してたんですけど、別の、また来てくださって言われたんやけど、風邪ももらったらいやよしと思ってなかなか行けなくて。ここやったら別に風邪の人いるわけじゃないから。行きやすいなって〔E23-1〕

・ここだったら、先週来て一番思ったのが消毒とかちゃんと置いてあったりとか、おむつ替えの時は声かけてくださるとかしてたので、やっぱり病院のほうがちゃんとしてるのかなって。おもちゃでも全然遊ばしてるんですけど〔G35〕

表2. 養育者が認識した看護職の働き

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
些細な気がかりに 応じてくれる	些細なことでも相談に応じてくれる	<ul style="list-style-type: none"> ・些細なこと、ふと思うことでも気軽に聞ける (B, F) ・些細なことに親切に答えてくれた (B) ・看護職に話すことでホッとでき、良かった (G)
	気がかりに対して情報や知識、考え方を提供してくれる	<ul style="list-style-type: none"> ・気になることを聞いたら細かく答えてくれたのでよかった (B, D) ・自分だけじゃわからないことが知れて助かった (E) ・ネットからは得られないちゃんとした情報をくれる (F) ・悩んでいたことに対して言われた言葉に「あっそうか」と楽になった (G) ・そういう感じでやっていこうと思える方法を教えてもらった (G)
	具体的な数値をもとにアドバイスをしてくれる	<ul style="list-style-type: none"> ・授乳前後の体重を測ったうえで相談ののって助かった (E) ・直接飲めている母乳量を知ることでちゃんとミルクを始めようと思うきっかけになった (E)
	子どもの体をみながら子どもに何が起きているのか説明してくれる	<ul style="list-style-type: none"> ・直接子どもを見て、子どもの体の特徴から原因を説明してもらい安心した (C, G) ・泣くのは自分のせいではなく子どもの体の特徴が関係していると分かり前向きな気持ちになれた (C)
	子どもにとって効果的な関わりを見極め、続けやすいやり方を見せながら教えてくれる	<ul style="list-style-type: none"> ・目の前でやってもらうことで効果や気持ちよさそうな子どもの様子が見れて、自分もやろうかなと思えた (F) ・教えてもらった方法を家でもやってみると効果があると思った (C, F)
	子どもの成長を数値で見せてくれる	<ul style="list-style-type: none"> ・正確な体重を測ってもらえるのはありがたい (A, E) ・体重・身長を測ってグラフに記載してくれた (E)
子どもの成長発達を可視化させてくれる	子どもの動きから発達を示すサインを教えてくれる	<ul style="list-style-type: none"> ・親が気づいていない子どもの動きに気づいて教えてくれるので安心できる (A) ・祖父母は何でも肯定するので、子どもの運動面の発達について看護職の冷静な判断が欲しい (A)
「行こう」と思える場を作り出して くれる	スタッフから積極的に関わってくれる	<ul style="list-style-type: none"> ・スタッフが養育者ともよく話してくれる (A) ・他とは違い、ここではスタッフが子どもを見てくれたり、遊び方を教えてくれる (C)
	気がかりを話しやすいように看護職から聞いてくれる	<ul style="list-style-type: none"> ・看護職から聞いてくれたので気にかかっていることを言えた (A) ・看護職から言ってくれと、そういえばと言いやすい (A)
	話を聞く姿勢でいてくれる	<ul style="list-style-type: none"> ・親身になって話を聞いてくれた (F) ・話を聞いてくれるため、また行きたいと思う (F)
	継続的に関わってくれる	<ul style="list-style-type: none"> ・いつもいてくれると聞きやすい (C) ・顔なじみの人にアドバイスを受ける方が安心で、信頼できる (G)
	養育者同士で話しやすくしてくれる	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ月齢の子どもがいる養育者と話ができるようスタッフが話を振ってくれる (C) ・養育者の中にスタッフがいてくれると話しに入りやすいし、みんなで話しやすい (C)
	感染を防ぐ対策をしてくれる	<ul style="list-style-type: none"> ・外来患者と接触せずに来室できるため、安心して利用できる (E, G) ・おもちゃの消毒や排泄物を介した感染を防ぐ配慮があり、安心して利用できる (G)

2) 乳児の養育者が捉えた本子育て支援の場の特徴

乳児の養育者が捉えた本子育て支援の場の特徴として集約されたカテゴリーは、【養育者同士で話せる】【気軽に看護職に相談できる】であった。

(1) 【養育者同士で話せる】

このカテゴリーは、養育者が本子育て支援の場について、養育者同士会って話ができる、同じ悩みを話せる、養育者同士の距離が近い場と捉えていることを示していた。これは、＜会って話ができる＞＜同じ悩みを話せる＞＜養育者同士の距離が近い＞の3つのサブカテゴリーで構成された。

＜会って話ができる＞は、養育者が本子育て支援の場を、養育者同士で話がしやすく、ママ友と交流できる場として捉えていることを示していた。養育者は、養育者同士で話したいし聞いてほしい、直接会って話してリアルな共感がほしいと思っており、共感できる仲間がいると一人じゃないと思えることを示していた。

- ・自由に話して、(他の)お母さんともしゃべってるし、しゃべれるし、全然いいと思う。そんなに、人が入らないから逆に輪になってしゃべるといいかなって思います。あんまりね、人が多すぎたら多すぎたでまた、名前がわからないし、とかってなったり、こんがらがってきますんで、ここはここがいいと思います [D46]
- ・携帯で繋がれる事もできるけど、会ってしゃべってそうだよねって、すごい大事だと思います [D30-2]。それがないと、リアルの共感がないとやっぱり納得できないですよね。(略)やっぱり今SNSとかつながり強いんですけど、みんな集まって、子どもとママと、集まって(略)、細々お話できる場があるとだいぶ違うと思います [D31-1]

＜同じ悩みを話せる＞は、子どもの月齢が近いと悩みが同じことが多く、話していて参考になると養育者が思っていることを示していた。

- ・どなたか(他の養育者)が話してるのを、あっ私もそれは思ってたと思って聞いてたりとか、まだ寝返りしないとかするとか、どういう運動今したらいい

とか、そういう話は月齢近いと、ああうちもうちもとなるのが私は多いので、(他の養育者の話は)参考になるなと思いますね [C14]

＜養育者同士の距離が近い＞は、養育者が本子育て支援の場を、空間が広すぎず、養育者同士の距離が近い、1階や2階に分かれていず空間が一つなので他の養育者に話しかけやすいと感じていることを示していた。

- ・私が行ってるところは一階と二階があって、階段とか上ったりするの子どもさんとか好きやから、階段ですずっと遊んでたりとかする [C54]。(他の養育者に)話しかけるのは話しかけにくいかなと思います [C55]

(2) 【気軽に看護職に相談できる】

このカテゴリーは、養育者が本子育て支援の場について、看護職と直接会えて、気軽に相談できる場と捉えていることを示していた。これは、＜気軽に看護職に相談できる＞の1つのサブカテゴリーで構成された。養育者は、直接会って気軽に看護職に相談できると安心すること、そのような場を求めているがなかなかないこと、本子育て支援の場では看護職に聞きやすい雰囲気があり、看護職に気軽に相談できると捉えていることを示していた。

- ・交流の場って聞いてたので、離乳食の事とか子育ての事で(看護職に)色々相談にのってもらえるよっていうのを聞いたので(来ました) [G6]。(略)保健師さんにたまに電話したり分からないことを聞いてたりしてたんですけど、やっぱり電話よりも会って話したりとか他の方の話を聞けるっていうのが、そういう場があればいいなと思ってたんで(来ました) [G8]
- ・便秘のこととかもインターネットで見てたぶんそうだからそうなんだろうなって思っても、誰かに大丈夫って言われたりこのくらいだったらいいよいいよって言われないと、なんか不安なんですよね。それをちょっと専門的な人に言ってもらえるだけで大丈夫なんだよってというのが、(略)モヤモヤ感が残るんですよね一人でやっていると。それを言ってもらってだけでも、やっぱりそうですよねってだけで

も十分ですし [F17-2] (子どもを直接見てもらってから大丈夫と言ってもらうと) ああ、それはでも、一番それはそうですね。一番ですね、一番にというかすぐ安心できますよね [F18]

- ・ 何となくそういう病院の人にいろいろ話せる機会って、そんなにないかなというか、何か受診したときとかに聞いたりはできると思うんですけど、普通に気軽に話してできたりとかする場って、なかなかないかなと思ったんでいいかなと思って [B25]
- ・ (相談) しやすいです。いちいち聞いていいのかなとかっていうのとか、(略) こないだの1回目のときは一緒に遊ばしてもらいながら世間話じゃないですけど聞きやすかったの、すごく良かったです [G63]

VI. 考 察

1. 乳児の養育者が捉えた看護職の働きと本子育て支援の場の特徴から考える、本子育て支援の場が果たしている機能

本子育て支援の場を複数回利用した乳児の養育者は、看護職が、養育者の些細な気がかりに応じ、子どもの成長発達を可視化させ、養育者が「行こう」と思える場を作り出すという働きをしていることを捉えていた。そして、それについて乳児の養育者は、「良かった (B、D、

G)」「助かった (E)」「楽になった (G)」「安心した (A、C、E、G)」「前向きな気持ちになれた (C)」「効果があると思った (C、F)」「ありがたい (A、E)」「また行きたい (F)」のように評価していた。乳児の養育者は、看護職から専門的で実践的なアドバイスが欲しいと思っている^{2) 3)}。本子育て支援の場において看護職は、乳児の養育者の些細な気がかりに対して情報や知識・考え方を提供したり、具体的な数値をもとにアドバイスしたり、子どもの体を見ながら何が起きているのか説明したり、対策として続けやすい関わり方をやって見せたりすることで応じ、日々成長している子どもの成長発達を養育者が捉えられるように数値や動きとして示すことで、乳児の養育者の「専門的で実践的なアドバイスが欲しい」というニーズに応えていたと考える。

さらに看護職は、自ら積極的に養育者や子どもに関わったり、気がかりを話しやすいように問いかけたり、養育者同士の交流を促したりすることで養育者が「行こう」と思える場を作り出していた。乳児の養育者は、「人とのつながり」の中で同じ体験をしている人に育児について話をすることや、助産師など専門的知識を持っている人に相談することで安心を得る²⁾。そのために養育者が安心して利用できる場、養育者が看護者や他の養育者と話しがしやすい場を作ることは、本子育て支援の場が養育者のニーズに応えて機能するために必須のことであったと考える。

表3. 養育者が捉えた本子育て支援の場の特徴

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
養育者同志で話せる	会って話ができる	<ul style="list-style-type: none"> ・ 養育者同士で話しがしやすい (A, D) ・ ママ友と交流できる (B, F) ・ 女の方は話したい話を聞いてほしい (D) ・ 会って話して「そうだね」というリアルな共感が大事 (D) ・ 共感できる仲間があると、一人じゃない、大変なのはみんな一緒と思えて心強い (D, E)
	同じ悩みを話せる	<ul style="list-style-type: none"> ・ 月齢が近いと悩みが同じことが多い (C) ・ 月齢が近いと話していて参考になる (C)
	養育者同士の距離が近い	<ul style="list-style-type: none"> ・ 空間が広すぎず、養育者同士の距離が近い (C) ・ 空間が一つなので話しかけやすい (C)
気軽に看護職に相談できる	気軽に看護職に相談できる	<ul style="list-style-type: none"> ・ 直接会って看護職に相談できる場が必要 (D, G) ・ 直接会って相談にのってもらえると安心する (F) ・ 看護職と気軽に話せる場はなかなかない (B, C, F) ・ 看護職に聞きやすい雰囲気があった (C, G) ・ 看護職がいるので相談できる (D, E)

先行研究では、実際に看護職がいる子育て支援の場で子育ての不安や悩みを直接専門家に気軽に相談できた養育者は、そのことで満足を得、子どもの成長を確認できるようになった、自分の子どもを客観的に見るようになったと自分の変化を報告している⁹⁾。本研究では、看護職が気軽に養育者の相談に応じることができる子育て支援の場において、看護職がどのような働きをしているかの一例を示した。本研究で明らかになった看護職の働きは、子育て支援として養育者に求められる看護の具体的方略として活用できる。

また、乳児の養育者は、看護職等医療者に気軽に相談できること³⁾、本やマス・メディアからではなく会話から情報を得ることを必要としている²⁾。本子育て支援の場の看護職は、子育て支援の場に常駐して養育者と出会う環境を作り、直接対面して会話し、子どもの様子や体を養育者と共に確認して相談に応じることで、“気軽に会話しながら看護職等医療者に相談したい”という養育者のニーズに応えていた。このことから、子育て支援の場に看護職が常にいることの重要性が示唆された。

乳児の養育者は、本子育て支援の場を養育者同士で話せる場、気軽に看護職に相談できる場と捉えていた。このことは、看護職が行っていた場づくりや関係性づくりに向けての評価であり、本子育て支援の場そのものが持っている機能を表していると考えられる。本子育て支援の場が開設されるきっかけとなったアクションリサーチ³⁾では、“養育者同士で話ができて、気軽に看護職等医療者に相談ができ、親子で楽しめる場”が求められており、本子育て支援の場もそれを目指してきた経緯がある。本研究においては、このうちの二つが本子育て支援の場の機能として抽出された。

本研究では、「ここに来ると看護師さんとかボランティアの方とか保健師さん保育士さんが見てくれたり、遊び方とかも教えて頂けるのでほんとにそれはありがたい(C5-3)」のように、遊び方を教えてくれるというデータはあったが、一緒に遊んで楽しんだというデータは見られなかった。親子で楽しめる場としての側面について抽出されなかった背景には、面接を行った時点では本子育て支援の場が開設されてから2.5~4か月(実施回数9~14回)しか経過してはず、まだ積極的に親子遊

びのためのプログラムが導入されていなかったことが影響していると考えられる。乳児の養育者は積極的に親子で遊んで楽しむプログラムや、父親を巻き込んで家族一緒に楽しむプログラムを求めている³⁾。本子育て支援の場では、開設6か月後から絵本読み聞かせや手遊びを定期的に、また手作りおもちゃの取り組みを随時開催するようになり、教育講座の中でもベビーピクスやベビーマッサージ、音楽にのせた親子あそびなどを取り入れるようになった。親子で楽しめる場として養育者がどのように捉えているかについては、今後の課題である。

加えて、親子で楽しめる場としての側面が抽出されなかったことには、面接のインタビューガイドが影響していた可能性も考えられる。面接では、本子育て支援の場への参加時に求めていたこと、本子育て支援の場に参加してどうなったか(問題は解決したか等)という視点をもとに、乳児の養育者が本子育て支援の場で体験したことについてその具体的内容や思い(受け止め)を聞いた。乳児の養育者は、「離乳食の事とか子育ての事で(看護職に)色々相談にのってもらえるよっていうのを聞いたので(来ました)[G6]」というように、本子育て支援の場を最初から看護職がいる場、看護職に相談できる場と認識して参加しており、面接時もそこに関連した内容に焦点が当たっていた可能性がある。

2. 大学と病院の連携による子育て支援について

乳児の養育者は、「ここはほんとに、助産師さんとか先生だとか、研究の方みなさんが親身になっていろいろお話を聞いてくれるとこだなっていうのがあって、それが他のところと違うところですね。(他の子育て支援の場のスタッフも)聞けばもちろん話してくれますけど、そんなに入ってこようとはしないんですよね、あんまり。そこがどっちかっていうとここのほうがしっかりされてる感じですね。相談事とか。そういう意味で何か困ったことがあったら、友達ともしゃべれるしここ来たついでにいろいろ先生に聞けるし、話が出るしいいなっていうのはありますね[F11-2]」というように、他の子育て支援の場にはない本子育て支援の場の特徴として看護職が話を聞く姿勢でいてくれると捉え、相談対応の充実を評価していた。面接時点における本子育て支援の場の運営は、大学と病院にそれぞれ所属する看護職4

名（全員助産師で、内1名は保育士資格と実務経験もあり）に加えて、市の社会福祉協議会に登録する一般ボランティア1～2名が常駐して行っていた。さらに、病院の医療者（看護職、医師、薬剤師、栄養士、歯科衛生士、臨床心理士等）が必要に応じて相談対応に協力する体制となっており、相談対応する看護職が求めた場合、実務に影響のない範囲で協力が得られる状況があった。毎週定期的に看護職が複数常駐する子育て支援の場を開催できるのは、大学と病院それぞれが人材を出し合っ共同企画し、病院が場の提供と看護職の相談対応へのバックアップ体制を担い、大学が財源確保や市社協など地域との連携づくりを担うことで実現できていたと考える。

実際に、「この子が体重が軽いので、そこをちょっと気にして、そしたら小児科の看護師さんが来てくれて、授乳前と授乳後の体重測ってくれたり、相談に乗ってくれたから助かりました [E7-2]」が示すように、病院の医療者が専門的な相談に対応していた。また、「何となくそういう病院の人にいろいろ話せる機会って、そんなになかなかないとか、何か受診したときとかに聞いたりはできると思うんですけど、普通に気軽に話したりとかする場って、なかなかないかなと思ったんでいいかなと思って [B25]」というように、医療者と受診以外で出会い、気軽に相談できる場としても本子育て支援の場は養育者に評価されていた。大学と病院が連携して子育て支援を行うことは、その取り組みを継続させることや相談対応の質を担保すること、養育者が医療者を身近に感じることに寄与する可能性があると考えられる。

3. 研究の限界と今後の課題

本調査は、本子育て支援の場を開始して2.5～4か月（実施回数9～14回）経過した時点で行ったものであった。運営方法を試行錯誤している段階に面接を行ったこと、限られた研究協力者に面接を行ったことから、本子育て支援の場の機能としての一部しか明らかにできていない可能性がある。また、面接を担当した者は本子育て支援の場に常駐する看護職であり、相談対応などに直接関わった者が面接をすると面接者の聞き方に偏りが生じたり、研究協力者である乳児の養育者が話す内容に偏りが生じる可能性が考えられた。そこで、面接を担当する際はその養育者への相談対応などに直接関わっていない

者があたることでそれらの偏りが生じないように配慮したが、全く接触していないことはないため、得られたデータに偏りが生じた可能性は否定できない。さらに、本研究は乳児の養育者が認識した体験に焦点を当てた分析であり、本子育て支援の場で活動する看護職の意図性がそれと一致しているかは明らかではない。

本子育て支援の場は、開設年度の翌年にあたる平成28年度には延べ1,000人の乳幼児とその養育者や家族、および妊婦とそのパートナーが利用している。本取組を新しい子育て支援のモデルとして発信していくためには、理論的サンプリングや子育て支援の場に携わっていない研究者が面接を行うなど研究方法を精緻化すること、本子育て支援の場で活動する看護職の意図性を踏まえて本子育て支援の場の機能を検討すること、乳児の養育者だけでなく幼児の養育者や妊婦等に対する看護職の働きや場の機能も検討することから、本子育て支援の場の更なる評価を行う必要がある。

VII. 結 論

看護職が常駐する子育て支援の場では、看護職が養育者の些細な気がかりに応じ、子どもの成長を可視化させ、養育者が「行こう」と思える場を作り出すという働きを行っていた。また、養育者にとっては、養育者同士で話せる場であり、気軽に看護職に相談できる場として捉えられていた。本子育て支援の場は、養育者同士で話したいというニーズと、専門家に気軽に相談したいというニーズの双方に応える場となっていた。

謝 辞

本研究に快くご協力して下さった養育者の皆様に心より感謝いたします。本研究は平成27年度兵庫県立大学特別研究助成金を得て実施した。

利益相反

本研究において開示すべき利益相反はない。

引用文献

- 1) 宮本政子, 船越和代, 中添和代, 時岡恵美, 森美代子, 渋谷幸彦. 乳幼児を持つ母親の育児不安の現状とその要因. 香川県立医療短期大学紀要. 2, 2000, 115-121.
- 2) 鶴山愛子, 久米美代子. 産後1ヵ月の母親が必要としているソーシャル・サポートの検討. 日本ウーマンズヘルス学会誌. 4, 2005, 19-31.
- 3) 岩國亜紀子, 槻木直子, 菅野峰子, 大前耀子, 酒井淑子, 武田穂奈美, 坂田明子, 寺嶋智穂, 濱野由起, 仲田敦子, 黒島華恵, 川村桃子, 川西貴志, 松本奈美, 岡邑和子, 川下菜穂子, 赤松恵美, 工藤美子, 山本あい子. 乳児の養育者と共に考える子育て支援プログラムの評価～参加型アクションリサーチ～. 兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要. 24, 2017, 115-130.
- 4) 畑山みさ子. 少子化対策としての子育て支援の現状と課題. 宮城学院女子大学発達科学研究. 10, 2010, 63-67.
- 5) 公益社団法人兵庫県看護協会. 平成27年度『まちの保健室』事業報告書. 2016, 24-27.
- 6) 野口あけみ, 山川裕子, 福澤雪子, 平川俊夫. 産後の母親に対する24時間電話相談の利用状況と課題. 日本看護学会論文集母性看護. 41, 2011, 82-85.
- 7) 安藤知子, 家入節子, 衛藤久美子, 立川雅子, 久々宮美香, 田淵孝枝, 大井洋子, 木下博子, 藤本保. 当院での育児支援活動. アルメイダ医報. 27(2), 2002, 118-120.
- 8) 軽部敬子, 井上佐祐実, 丹野かおり, 古瀬みどり. 病院の「子育て支援の会」が母親へ与える影響. 日本看護学会論文集母性看護. 42, 2012, 54-57.
- 9) 大林陽子, 岡田由香, 緒方京, 神谷摂子, 志村千鶴子, 佐久間清美, 金尾洋治, 高橋弘子. 大学を拠点とした子育て支援事業の活動報告と評価. 愛知県立大学看護学部紀要. 17, 2011, 33-39.
- 10) 笹尾あゆみ, 山本八千代, 前田尚美, 草野知美, 伊織光恵, 市川正人, 小池伝一, 須藤桃代, 関口史絵, 福原朗子, 三田村保. 北海道科学大学が提供する地域子育て支援活動. 北海道科学大学研究紀要. 41, 2016, 213-216.
- 11) 荒木奈緒, 安藤由美子, 梅本智子, 五十嵐幸枝. 出産病院で実施される産後1～3か月の母親を対象とした子育て支援活動の効果. 母性衛生. 57(1), 2016, 183-190.
- 12) 中西伸子, 牛尾禮子. 乳幼児を持つ養育者の「子育て支援」に関する要望. 奈良県立医科大学医学部看護学科紀要. 9, 2013, 13-22.
- 13) ブリタニカ・ジャパン株式会社. ブリタニカ国際大百科事典小項目事典. (オンライン), 入手先<<https://kotobank.jp/word/%E6%A9%9F%E8%83%BD-51310>> (参照2016-11-22)

A Study on the Function of a Parenting Support Center Staffed with Nurses — Parenting Support through Coordination between an University and a Hospital —

TSUKINOKI Naoko¹⁾, IWAKUINI Akiko¹⁾, SUGANO Mineko²⁾, TACHIBANA Takako²⁾
MINOURA Yoko²⁾, AKAMATSU Megumi³⁾, KUDO Yoshiko⁴⁾, YAMAMOTO Aiko⁵⁾

Abstract

Purpose

To explore the functions of a parenting support center staffed with nurses based on the experiences of parents using the center.

Methods

A qualitative exploratory study was conducted via semi-structured interviews. Study participants were parents of infants who used the parenting support center multiple times. Recorded data obtained through interviews were transcribed verbatim, and the contents were analyzed with a focus on the function of the nurses and how parents viewed the center.

Results

Participants were 7 mothers with a mean age of 33.1 ± 4.1 years caring for an infant 5–10 months of age. Analysis of transcripts revealed that parents viewed the function of the nurse as “addressing minor concerns”, “visualizing how children were growing and developing”, and “creating a place that parents want to use”. In addition, parents viewed the parenting support center as “a place where parents can talk with one another” and “a place where parents can readily consult nurses”.

Conclusion

At the parenting support center staffed with nurses, the nurses served to address minor concerns of parents, to visualize how children were growing and developing, and to create a place that parents want to use. For parents, the parenting support center was viewed as a place where parents could talk with one another and a place where parents were able to readily consult nurses. The parenting support center met the needs of parents wishing to talk with one another and to readily consult specialists.

Key words : parents of infants ; nursing ; educational institution ; medical facility ; semi-structured interview

-
- 1) Perinatal Nursing Care Research Center, Research Institute of Nursing Care for People and Community, University of Hyogo
 - 2) Hyogo Prefectural Amagasaki General Medical Center (AGMC)
 - 3) Nursing Course of Kochi Medical School, Kochi University
 - 4) College of Nursing Art and Science, University of Hyogo
 - 5) Research Institute of Nursing Care for People and Community, University of Hyogo